

タイトル: 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」平成 24 年度第 1 回公開セミナー

日時: 平成 24 年 4 月 24 日(火曜日) 午後 6 時 30 分より午後 8 時 30 分

会場: AA 研マルチメディア会議室(304)

報告者: 中村香子(京都大学アフリカ地域研究資料センター 機関研究員)

報告タイトル: 「「伝統衣装」をまとってあゆむ「グローバリゼーション」の道すじ—ケニアの牧畜民サンプルの「戦士」とビーズ装飾」

## 報告要旨

「アフリカの伝統衣装」として、まずビーズ装飾を思い浮かべる人は少なくないだろう。なかでも、全身を色鮮やかなビーズの装身具で飾りたて、赤い布を身にまとう「マサイの戦士」の姿は、「伝統的なアフリカの民族」のイメージとして多くの人の脳裏に浮かぶにちがいない。しかし、この「伝統衣装」に使われているビーズが、実はチェコからの輸入品であることはあまり知られていない。

チェコ製のガラスビーズがケニアにもたらされたのは 20 世紀の初頭に遡る。当時の写真資料を見ると、マサイだけでなく、現在はすっかり「近代化」してシャツやジーンズをおしゃれに着こなしているキクユやカンバといった農耕民も、ともに真鍮やビーズの飾りを首、腕、手首、足首、ふくらはぎなどにつけ、腰には皮の腰巻きをつけている。両者の装いはほとんど区別がつかない。つまり、わずか 100 年のあいだに、農耕民はビーズを脱ぎ捨てて積極的に洋装文化をとりいれていき、一方のマサイは、より積極的にビーズを身につけることによって「伝統的な民族」となっていったのである。しかし、ビーズが高価な輸入品であることを考えれば、この 100 年のあいだに、キクユもマサイも同様にグローバル・マーケットの消費者になっていったのだが、その歩んだ道すじが異なっていただけであるという見方もできる。

本講座では、マサイ系の牧畜民であるサンプルを事例に、この半世紀のあいだに驚くほど派手になった彼らのビーズ装飾を写真や実物で紹介しながら、彼らがあゆんでいるユニークな「グローバリゼーション」の道すじとその背景を考察した。

\*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.